支えあう喜びを新しい世代へ
Issue Number 34
Calebasse
からばす
CARA
ASSOCIATION POUR LA COOPERATION ET L'AUTOGESTION RURALE EN AFRIQUE DE L'OUEST
企画/編集/発行　特定非営利活動法人
カラ＝西アフリカ農村自立協力会

http://ongcara.org/
からばす NO.34 2015/11/1 発行

西アフリカ・マリで貧困撲滅に取り組むカラの草の根アプローチ

元世界銀行エコノミスト 宮脇 卓

私は1974～80年の6年間アメリカの首都ワシントンに本部のある世界銀行に勤務した。世界銀行は第二次大戦後の復興と、開発途上国の開発支援をするためにIMF（国際通貨基金）とともに作られた国際機関である。日本も東海道新幹線の建設や、首都高速道路の建設に世銀からの借款（ローン）を受けた。

世界銀行の業務は、民間ベースでお金を調達することが難しい開発途上国のいろいろなプロジェクトに、世界銀行債を発行して調達した資金を提供するというのが主要なものである。世銀のプロジェクトは伝統的に道路、鉄道、電力などのインフラ建設が多かった。私が担当していたのはヨルダン、シリア、モロッコなどで、世銀を辞める直前の1978年に、シリアの高速道路プロジェクトへのローンの実行を担当した。その道路も数年前から続く内戦の中で、多分ぼろぼろになっているのではないかと思うと複雑な気持ちである。

1980年代に入って世界銀行をはじめとする国際援助機関のアプローチは、インフラ支援からもっと直接的に貧困解決を目指す方向に重点を移してきた。しかし貧困の問題はまだまだ根が深い。最近の世界銀行の報告書の中にある数字によると、貧困層を一人当たり1日の生活費1.9ドル以下としたとき、2012年の貧困層の人口割合は、東アジア・太平洋で7.2%、ヨーロッパ・中央アジア、2.5%、ラテン・アメリカ、カリブ海、6.2%、南アジア、18.8%、サハラ以南アフリカ、42.6%である。開発途上国平均は、15.0%であった。マリを含むサハラ以南のアフリカの貧困層の割合が依然として非常に高い。 2ページへ続く→

カラのマリでの活動は、最初は医療支援から始まり、その後様々な模索の中から、識字教育、裁縫など職業技術訓練、診療所開設などなど、多様な現地のニーズに直接応え、しかも現地のヒト・モノを生かしていく方法が見いだされ、定着している。貧困を撲滅する、生活水準を上げるといっても、その地域に合ったアプローチがある。先進国の製品や技術・システムをそのまま持って行っても駄目である。現地にあるものを使って、自分たちの技術で生活水準を上げていくという、草の根の地道な努力が大切である。カラのマリでの活動は、国際援助の活動・支援のあり方にも影響を与えていると確信する。さらなるご活躍を祈るとともに、若い人たちに受け継がれ広まっていくことも期待している。

私とカラとの関わり合いは、1977年に現カラ代表の村上さんにワシントンではじめてお目にかかった時からの縁である。村上さんは当時モントリオールに住んでいて、休暇でワシントンに遊びに来られた。現理事の岡部浩子が私の妻の姉であったつながりである。1990年代初めにカラがマリでの活動を始めて以来、一会員として形ばかりのささやかなサポートをしてきた。現地訪問への誘いも受けているがまだ果たせていない。

NGOでの３年間　～今思うこと～

津田塾大学４年　大内 侑美

カラに携わって３年が経ちます。これまでは「マリに行きたい」という強い思いに駆られて突き進んできましたが、マリに興味を持っていなかったら私はどんな大学生活を送ったのだろう、と時々考えることがあります。前回のからばす３３号に書きましたように２月には現地へ渡航、帰国と同時に就職活動が始まり、さらに５月には母校で教育実習を行ない、この半年はまさに怒涛の日々でした。大学生活も残り僅かとなりましたが、カラの活動に携わったことで知ることの出来た一つの途上国の現実や、貧困脱却のための取り組みを卒業論文で書くことが学生生活最後の大仕事となりそうです。

生まれた初めて見たバオバブの木

● 現実を知るということ

国際協力に興味はあるけれど、何から始めれば良いのか分からない。そんな時に、思い切って村上さんにメールを出したことがきっかけでカラに携わることが出来たのはとても幸運なことでした。国内では都市部と農村部の貧富の差が大きいので、マリの貧困率を下げるためには農村部の貧困を解消することが欠かせないと言われていますが、マリの農村部まで大学生が調査をしに行くのは到底不可能です。現地に行って分かったのですが、私の母校が支援で建てた識字学校は首都から車で３時間も離れたところにあり、もし１人で行こうとするならバスで途中まで行けますが、その先の舗装されていない道路から何十キロも歩かなければならないのです。気温が３０度以上ある中で、標識も無く右か左も分からないような素人大学生が夢を追って農村部に飛び込むのは無謀すぎることです。

しかし、日本にいると生活がどんなに異なっているか想像が付かないので、現地で現実を見ることで初めて納得いくことがたくさんありました。その他にも、なぜ毎月のように車の修理費にお金が掛かるのか（道が悪いため車の故障が非常に多い）、なぜ携帯電話を持っているのにテレフォンカードが必要なのか（プリペイドカードのように使う分を前払いする）、そして地域ごとに支払わなければいけない通行税とは一体何なのか、一日中停電するとはどういうことなのか等、不思議に思っていた一つひとつの意味が分かるのでした。

女性スタッフが見せてくれた刺繍製作の様子

● カラの支援

カラの活動で大切にしている**【知識を得て考え、実行する】**という考え方は、農村部の人々が貧困から抜け出すための第一歩であることを知りました。

例えば、女性がお金を稼ぐために商品を売ります。そのために女性センターでは編み物、裁縫、刺繍、石鹸作り等を教えます。女性はそこで技術を身に付けた上で、物を売り、お金を得ることで自信を付けます。成功するとカラの小規模融資活動を卒業し、自分自身でビジネスを始める人もいます。そしてどうやって成功したのかを知り、真似していく人もいます。

このように女性達はドナーのNGOの活動だからといって参加するのではなく、カラの支援の方法が刺激となって、積極的に事業に取り組み、自ら考え行動することで成功を掴むのです。カラが現地の人々から信頼されているのは、このような支援方法への成果に手応えを感じているからではないかと思います。貧困解決のために色々な考えがありますが、人々が気付いた時に行動できるよう時間を掛けて知識や知恵を与え、見守ることがカラの活動の特徴であることを改めて感じました。

月一度の小規模貸付の返済日の様子

カラ コンサート
開催のお知らせ

かけはし2016　～ みなさまへの感謝をこめて ～

日　時：2016年２月28日（日曜日）
会　場：銀座 十字屋ホール
出　演：原田 康子、並木 健司、マンスール ジャーニュ、村上 一枝
問合せ：カラ事務局（tel：0422-29-7640　e mail：centre@ongcara.org）

はじめに

村上 一枝

２０１５年の雨季の降雨量は非常に少なく、そろそろ始まる主食となるトウジンヒエの収穫期に向って、人々は非常に不安な日々を過ごしています。
しかしそのような状況のなか、感心する報告が現地スタッフから送られてきました。
それは、女性たちが続けている「小規模貸付事業」の元金の多くを村の人々の穀物購入資金に充てる、と云うものです。現在、トウグニ地域２１ケ村中９ケ村の女性たちはこの事業を継続しており、夫々の村で資金は違いますが女性の得た収入が今期の緊急事態、食料不足を救うのです。

またマリ共和国政府レベルの事業として、マラリア予防が妊産婦と０～５歳児までを対象に実施され、カラ開設による7ケ所の産院の助産師・看護師が協力したということです。今後の成果を見つめて行きたいと思っています。

更に私たちにとって嬉しかった事は、マリでも非常に多い「オンコセルカ症（河川盲目症）」撲滅に貢献なさった大村先生がノーベル賞に輝いたことです。カラの活動地域で車体にオンコ（ONCO）と書いた自動車と出会うことが多くありました。現在は見かけなくなりましたが、薬剤の成果が表れてきた事だと思います。2011年に外務省Ｎ連支援事業で診療所を建設したスウバ村はニジェール河畔にあり、河水が生活用水でしたから、多くの老人の眼球が白い幕で覆われたようになっていました。地域によっては老人の殆どが「オンコセルカ症（河川盲目症）」の村もあります。

また、今２０１５年度上半期はカラも建設ラッシュで、ドゥンバ地域のシンザニ中学校、今まで校舎無しで学習を続けていたニャマコロブグー村に新たに小学校が建設されました。これらは外務省のＮ連事業の支援に依るもので、マリの義務教育の普及に貢献するものです。そしてシラマンブグー識字教室、バブグー村とニャマコロブグー村へ各１産院が建設されました。この産院は２０１６年２月に開院予定で、そこで働く予定の助産師が現在バマコで研修中です。ソニブレ村にも識字教室の隣にトイレットが1棟建設されました。また、8月にはカチョラ小学校で生徒や教師、父兄と近隣の村のボランティアが参加して1haの学校林を造成しました。

今までの支援事業全体を振り返ると、かなりの部分で女性の底力が発揮されて来たように思います。その女性の力が男性の心を動かして来ました。勿論社会的には女性の全ての行動は男性の許可が必要です。識字学習へ参加するのも、野菜を作るのも実家へ行くのも同様です。しかし夫が妻と一緒に家族計画の為に産院に来るようになったのは大きな変化で、女性たちの努力の結果です。今までは通常村で最年長の男性が（たとえ病気であっても）村長となっていましたが、その内に女性の村長が誕生するかも知れません。

女性貸し付け事業の発展について

この事業は、年間の降雨量が経済不安をもたらす状況を何とかして安定させる為に、「女性たちも夫同様に収入を得たい」という願いから始まったものです。当時セグー地域で行なわれていた、カナダのＮＧＯの支援による女性を対象とした小規模の資金貸し付け事業の成果を聞いた村の女性たちが、カラの活動地域でも実施したいという声を活かした事業です。しかし当初はこの事業の要請があっても、カラ側では色々な不安があり、果して決められたように返済は可能なのか？　またお互い理解し合って進めることが出来るのか？　ということで躊躇していました。特に村の人たちは、貸した金の返済が滞っても、その逆であっても催促すると言うことがあまりなく、おおごとにしないで、所謂泣き寝入りで過ごしてしまう社会のようです。カラは資金を出すことは出来ないことを伝え、但し「あなた達が事業資金を蓄えたら開始を許可します」と言うことを伝え数年が経過しました。その間女性達は野菜園からの収入や、女性適正技術から生み出す製作物の販売収入を蓄えて、2002年に待望の貸付事業を2ケ村（コニナ、モバ村女性委員会）でスタートしました。この事業は現在も続き9ケ村に広がっています。

これらは全て女性達の力によるものです。貸付期間（初期は4ケ月、現在は5ケ月）や利息（10%）も全て女性達が相談して決めました。返済を滞った女性は未だ一人もいません。長い年月の間に元金が増えた村では、長年借り入れていた人たちは辞退し、現金が渡され、代わりに若い主婦達にその権利を譲った村もあります。しかし、今年2015年の降雨量の減少でトウジンヒエの成育が非常に悪く食料不足が確実になったので次の表のように各村の女性委員会では穀物購入金のために次回の貸し付け資金の多くを食料購入の資金に当て食糧不足を最小限に止めることを考えました。

村の女性委員会名	資金（cfa/2015年8月現在）	食料購入の為の額（日本円相当）	トウジンヒエ購入可能量
コニナ村女性委員会	330,000	150,000cfa（31,500）	1,250kg
モバ村女性委員会	1,820,000	1,270,000cfa（266,700）	10,583kg
カニカ村女性委員会	800,000	450,000cfa（94,500）	3t750kg
ママブグ村女性委員会	1,805,000	1,465,000cfa（307,650）	12,208kg
ベレニコ村女性委員会	1,690,000	935,000cfa（196,350）	7,791kg
ドンギネ村女性委員会	1,530,000	1,190,000cfa（249,900）	9,916kg
ンゴロブグ村女性委員会	820,000	465,000cfa（97,650）	3,875kg
コニナブグ村女性委員会	830,000	590,000cfa（123,900）	4,916kg
キバン村女性委員会	670,000	290,000cfa（60,900）	2,416kg

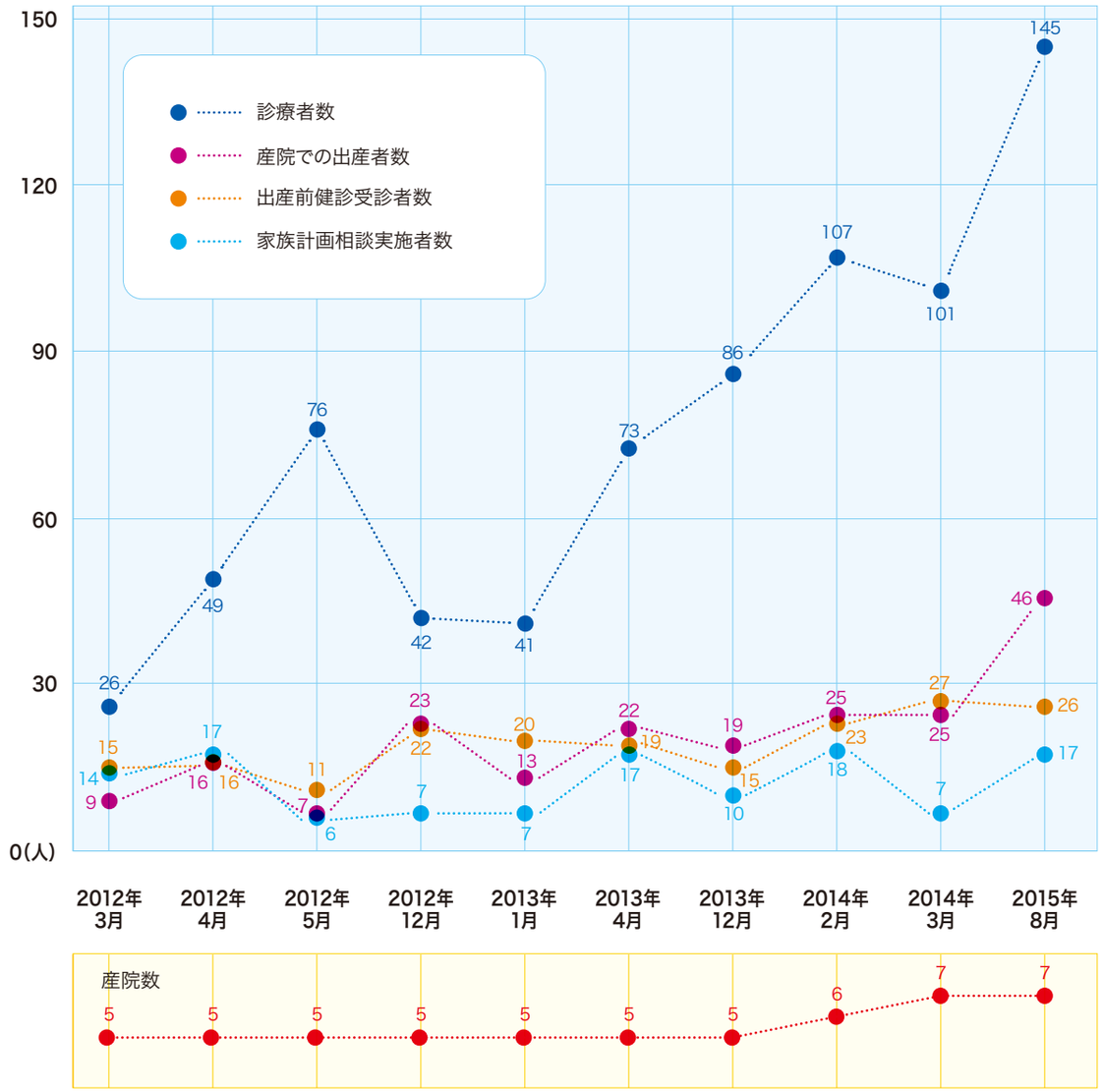
上記表中、トゥグニ郡で二番目に大きなコニナ村（人口800人前後）には既に穀物保存庫が建設され、常時村で穀物を備蓄しているので、女性委員会の費用での購入は少なくなっています。
1日のトウジンヒエ平均消費量は1家族2～3kg前後です。食料不足の時には1日2食の家庭も多くなります。
このように食料購入費に充てる以外に、事情に合わせて井戸修理や産院継続の資金に当てている村もあり、この事業は女性の知恵で非常に有効に活用されています。

スタッフのアワは、長い間貸付資金返済業務を村の女性に指導していましたが、今は彼女が居なくても村の女性がその役割を果たしています。これは、同じ村の人を金銭的な面で信用しない、という古くからの意識が強く、信用できるのはエトランジェ（つまり当村以外の人）だったため常にアワが必要だったのです。しかし事業はお互いの信頼が重要であることを説明した結果、この意識も改善されました。返済日には全ての女性が集り1 cfa（セーファーフラン）の間違いも無いよう、ガラス貼りの状況で行ないます。
女性が収入を得る方法は、落花生の栽培収入やカリテの油を製油しての販売が多いのですが、これらも降雨量に非常に左右されますから一定した収入を得ることは出来ません。現在進行中の貸付事業は、女性のもう一つの収入を得る手段として長く続く事と思います。

女性保健普及員の成果

2008年にスタートしたJICA事業の女性中心の保健普及員の育成終了後、この彼女たちの会「通称、K会」が各村で健康に関する知識の啓発活動を実施し、同時に診療所や産院が開設した事と相まって、現在は非常に多くの成果が見えてきました。それらをグラフで表してみました。　村の産院と診療所への来院数の状況、出産数（出産時の事故を防ぐために産院での出産を奨励しています）、家族計画普及の状況を表わしたもので、この目覚ましい変化は、夫も家族計画を理解するようになった事の現れです。また、子供に手洗いの習慣が普及し始め、子供の下痢の発症が非常に減少しました。妊婦検診者も増え、妊娠中の事故もゼロになりました。子供の予防接種も、ある部族以外の全ての子供が受けるようになり、父親が子供を連れて行く姿も見られるようになりました。これも注目に値します。

トゥグニ地区産院開設後の変革　　2012年以降～



その他、数字では表せない意識の変化が多くあります。この事業の成果は他の地域に伝わり、2016年から旧活動地区のドゥンバ地域で同様の事業を開始することになりました。以前カラが活動を行っていた時には、収入に直接結び付かない保健事業には全く振り向かず、薬だけに頼って、死ぬのは仕方がない、との意識が強かったのです。しかし現在は、家族の健康・子供の健康は自分たちの力で護ることが出来るということを知り、その機運が強くなって来たのは事実です。そのような理由でアワと2人のアシスタントスタッフ、村上で3年間の計画で保健事業を村の女性たちと実施することになりました。保健事業は、長いスパンで考える必要があり費用もさることながら我々にも強い忍耐を必要とします。2ケ村に産院が開設されるのと相まって今後は保健意識が高まると思います。

行政：コミュン（郡）からの協力

カラではトゥグニコミュンへ7ヶ所（村）の産院を開設し、それに付随して（看護師：村で雇用）診療所も併設しました。これによって村からは非常に感謝され、村の管理委員会が積極的に管理する意識が高まり、同時に病気予防にも関心を示すようになりました。これを重視した現トゥグニ郡長のダンベレ氏は各産院へ出産時に必要な小型ソーラパネルと発電機、備品一式、そして体重計とベット、戸棚を寄贈してくれました。

新シンザニ中学校とニャマコロブグー小学校

中学校がドゥンバ地区に２校となりました。中学就学率が約10%位の割で年々増加しています。現在のドゥンバ中学校にも定員80名の1教室に100人以上の1年生が学んでいます。
就学率が上がる事は非常に喜ばしい事ですが、マリの国が義務教育の徹底を叫んではいるものの、実現にはかなり遠い状況です。この中学校が出来た為に、地域を超えてモンザナ村やタファランブグー村からも30km近い距離を通学する生徒も増えるようです。またニャマコロブグー村は意識が非常に高い村で、この小学校が新設される以前は教師や村人が建てた柱と屋根だけの校舎で長年学習を継続していました。建設中は村長が毎日朝から夕方まで建設現場で進行を楽しんでいました。また、過去にもお知らせしましたように野菜作りが積極的です。この村から東方面には全く学校は建設されていません。まだこの国では義務教育のシステムだけが先行している悲しい教育事情です。

新事業への御協力のお礼と引き続きご支援のお願い

先にご説明したように、3年間に渡る新たな保健事業を、2016年1月頃からドゥンバ地域でスタート致します。この事業に就きまして、3年間になると非常に経費がかかり、助成金だけに頼る事はとても困難な事です。その為に今夏以来、会員の皆様にご支援をお願いしております。
厚かましい事ですが、10月現在、目標額には達しておりませんので、今後も引き続きご支援下さいますよう、心からお願い申し上げます。

国内活動

5/15	**【SI町田チャリティー コンサート】**にて事業進捗状況の説明	町田市
5/16	**【明星大学】**にて講演	明星大学
5/24	**【東京白梅会】**にて活動紹介	中野サンプラザ
5/27	**【SI伊那創立20周年記念式典】**にて現地活動紹介	松本市
6/20	**【SI埼玉クラブ・ユースフォーラム】**にて基調講演 「世界の女児の問題を考えよう」～男女による教育の違いはなぜ起こる～	ウエスタ川越
7/21	**【岩手県立紫波総合高校】**にて講演	岩手県紫波町
8/10～21	**研修生受入れ**	東京事務局
8/28	**【SI日本東リジョン ユース・フォーラム】**に参加	国連大学ウ・タント国際会議場
9/29	**【ワールドファミリー基金】**にて活動報告	ワールドファミリー基金事務所
10/13	**【いきな倶楽部】**にて講演	新潟県村上市
10/18	**地域への広報についての連絡会**	武蔵野市東町有志宅
10/20	**日本中近東アフリカ婦人会主催【第18回チャリティーバザー】**に参加	ロイヤルパークH
10/31	**【盛岡ふるさと会】**にて活動紹介	ホテルグランドパレス

<2015年11月以降の予定>　＊変更になる場合がございますので、詳細については事務局までお問い合わせください。

11/1	**【東京都女性歯科医師の会】**にて活動紹介	六本木ヒルズ
11/1	**【岩手県 紫波町ふるさと会】**にて活動紹介	東武ホテルレバント東京
2/28	**カラ チャリティーコンサート2016（予定）**	銀座・十字屋ホール

SI：国際ソロプチミストの略

からばす（Calebasse）–第34号–　2015年11月1日発行

特定非営利活動法人　カラ=西アフリカ農村自立協力会　http://ongcara.org/

東京事務局
〒180-0002　東京都武蔵野市吉祥寺東町1-1-6-102
Tel:0422-29-7640　Fax:0422-29-7688
E-mail: centre@ongcara.org

バマコ事務局
BP　E367　BAMAKO　MALI
Tel:223-2020-9096　Fax:223-2020-3589

デザイン:DeeplusDesigns